
19

揚羽蝶@根暗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

19

【Zコード】

Z6500C

【作者名】

揚羽蝶@根暗

【あらすじ】

リストカット、オーバーデーズ、援助交際、今の時代珍しくなくなってしまったもの…そんなことを繰り返す少女「真弥」。鬱の発病した中学時代・過ちを繰り返し、自分を見つけた高校時代・初めて足を踏み入れた憧れの歌舞伎町…そして、彼女は夢を掴むためキバ嬢になつた。今の時代どこにでも、いるようよつた1人の少女の成長…

「15」はじめ。（前書き）

感情移入しやすい方は読まない方がいいかと思います。

全てが事実とは言い切れませんが… 大半事実ですかね（^__^;）

その変はご想像におまかせします！

まだまだ完結ではありません。ちまちま書いてます。文才がないです。ごめんなさい。

「15」はじめ。

この小説は私の実体験を交えながら作ったお話です。

どこにでもいる、普通の女の子。
普通の意味がわからない。

何が普通で何が普通ぢゃないの?
あたしの名前は真弥。あたしは生まれてまだ19年。生きる意味を
…目的をやつとみつけたんだ。

あれは中学生の時だつた…何もかもが嫌になつた。忘れもしない…
夏の日。

「15」

またか…。毎日家では親が喧嘩。学校ではなんとなく過ぐして1日
が終る。

部活に行けば1人ぼっち。
生きてても意味がない。死んだほうがいいんじゃないの?そんなこ
としか、考えてなかつた。

暑くて仕方なかつたある夏の日、初めて手首を切つた。

「……、このまま死ねないのかな？」

親も学校も友人関係も何もかもが嫌になつたんだ。知らないうちにカツター持つて手首を切つてた。

痛くない。そう思つた。その日以来、毎日切つた。みるみるひびき、左腕がボロボロになつた。

「痛つ……」

体育の時いきなり左腕が痛んだ。

「どうしたの？ひねつた？」

バトミントンでペアーを組んでた友達が心配そうに話しかけてきた。

「……多分！なんともないよ！ちょっとひねつただけだから…」

「本当に無理しちゃだめだよ…」

「ありがとう！でも、大丈夫だから…」

ペイー…

集合の合図の笛の音が体育館に響きわたる。

運良くこの日の体育は6限目、この後授業はない。体育が終わつた後、あたしは慌ててトイレに駆け込んで腕をまくつた…。

体操服に少し染みてた。リストカットの傷口が開いてた。

赤く染まつた体操服。体操服の色のおかげで、幸い目立たない。血がとまるのを待ち教室に戻つた。

「大丈夫？気分でも悪かった？」

「うう、うん…ちょっとめまいがしただけ…」

「無理しちゃ駄目だよ？」

「ありがとう！」

その日、また部活を休んで帰った。

落ち着かない。頭が痛い吐き気もある。人が嫌だ、外に出たくない

…何にもヤル気が起きない…

そして、繰り返される自傷行為。
気が狂いそうだった。

そして、気がつけば冬になつてた。

中学3年生、受験真っ直中。

勉強するふりして起きてては手首を切つた。
眠れなかつた。

眠りたいのに眠れない。そんな夜が始まつた。

「死にたいよ…生きてちゃ駄目なんだよ…あたし…」

そんな言葉しかでてこなかつた。

でも、唯一の支えが音楽だつた。偏見の塊。みんな離れていつた。気持ち悪い、頭がおかしい。日々に言われた。

でも、支えなんだ。離れていつても別によかつた。だつて結局は友達なんかじゃなかつたもん。

そんなある日いつも一緒にいた何人かに手首をみせた…。

「駄目だよー切っちやー！もう、やめなよー！」

そんなことしか言われなかつた。

でも、苦しくなつてまた切つた。
駄目とか言われても無理だよ…
こつしなきや駄目なんだよ…

限界だつた。

そんなある日、いきなり親に腕をめくられた…

「何これ？」

「…………。」

「なんでもしたのー? あんたなんか生まなきやよかつたー!」

母にまで言われると思わなかつた。

父には

「死ね」って言われる始末。

ああ……私やつぱりいらぬ子だつたんだ……

「めんなさい。生まれてしまつていめんなさい。」

切れず泣いた。あの日あたしは、死にたかつた。
やつぱり疲れなかつた。たくさん薬を飲んだ。でも、疲れなかつた。死ねなかつた。

朝はきた：

いつもどおり、学校に行ってまた偏見つけて帰宅。

携帯がなつた……

母からのメールだつた。

謝罪の言葉と、ショックを受けたこと……メールをみてまた泣いた。

甘えることを忘れてきた、あたし。

愛されてないなんて勝手に思い込んでいたあたし。

生きていいんだ…生きなきゃ駄目なんだ…。

卒業して、少しは落ち着いたと思ってた。でも、ほんとの戦いはここからだった。

毎日、何もする気がおきない。外にでれない。人が怖い…、いきなり息苦しくなつてめまいに吐き気。

相変わらず夜は眠れない。

ネットを通してできた友達…唯一の理解者だった。

そんな彼女に相談した結果、あたしは病院に行く事にした。あちこち調べて、家から少し離れた病院を選んだ。

病院に着くまでの、電車の中、大音量で曲を聞き、下を向いたまま座つてしているのが限界だった。

小さな病院…、古い建物だった。

15歳だったあたしには、なんだか怖くてたまらない場所だった。

「どうぞ、診察室へ。」

簡単なアンケートを書いた後、看護師があたしを案内する。

「いんにちは。」

笑顔でこひらをむく医師。

「…………んにひは…………」

暫く、普通の話なんかもしながら病気の話をした。

医師に下された主な診断は鬱…。軽い対人恐怖。不眠症。だつた。

精神安定剤と眠剤をもらつた。

でも、数回通院してあたしは通院をやめた。

なんだか…あわなかつた。たかが数回の通院で、病気が治る訳もなく、同じ事の繰り返し。

リストカットもやめれなかつた。

あたしは、気がつけば高校生になつていた。

「真弥……おはよおー！」

「おはよおー！」

何でもない顔して、あたしは学校つてやつに馴染むのに必死だつた。でも、馴染めなかつた。

「真弥つて……こんな服きてるの……？」

「えつ？」

ロリヰタファッション。

あたしは昔から何かと個性が強かつた。あたしはロリヰタやゴシックって言われるジャンルが好きだった。好きな服を着てたら素の自分で、そして強くなれる気がした。また、偏見が始まった。怖いもので偏見つて、いつものもすぐに慣れ始めた。むしろ、好きな事をしてゐし堂々とやっていた。やつと友達もできだした。

「真弥ちゃんリストカットしてるの？」

「えつ……？」

「傷口が……見えちゃったから……」

あたしの手首から腕に残る傷跡、誰が見たってすぐわかる。でも、あたしは隠さなかった。

「やつてたよ。未だにやめらんないけど。」

「あたしもなんだ……滅多に切らないけどね。」

「そつか……」

あたしじだけぢやないんだ…そう思つた。

そしてこの頃からまたあたしは狂いだした。

援助交際…。お洋服も欲しいしライブにだつていきたい。部活でバイトしたつてあまりできない。

大嫌いな自分を今更いたわる必要もない。みんなやつてんじやん。

あたしは自分を売り物にした。

適当に話して金もらつて。ホテルいつて金もらつて。簡単じやん？怖くなんてない。もし、殺されたらむしろラッキーだ。あたしは死にたい人なんだから。

母からのメールを見て生きなきやつて思つたのは確かに…自殺願望は相変わらず消えなかつたし、病気も治らなかつた。辛いだけの毎日、支えといえば音楽。でも、お金がなかつたらライブには行けない、つまり自分を押さえる事ができない。だから、援助交際には手を出した。

知らない人に何回も抱かれた。

暫くたつてやつと何人か仲のいい子もできて、学校にも慣れた。

なんだかんだで楽しかつたな。

「真弥？」

「ん？何？」

「いい相手いた?」

「今日はいないな。」

「そかあー」

これが日常会話。友達がやつてるからやつてたわけぢやないけど…なんか情報とか交換してたなあ。

そんな生活が続いた。

気がつけばあたしは17歳。まだまだ大人ぶった子どもだった。

「17」絶望

まだまだ大人ぶった子ども。あたしは、17歳になった。

初めて手首を切ってから2年。初めてオーバーボードーズをしてから2年。

あたしは、何も変わつてなかつた。

「真弥！今日暇？？」

「…？なんで？？部活終わつてからなうじいよ。」

「じゃあ、また連絡するよ。」

「うん、わかつた。」

中学の頃とは違ひ、一応真面目に部活には行つてた。楽しかつたし、偏見する子もいなかつた。先生つて大嫌いだつたけど顧問の先生は違つた。

あたしは、あまりリストカットをしなくなつてた。その代わりにピアスをたくさんあけた。校則違反だつたけど、あたしにピアスはなくてはならないものだつたから。何がある度にあけた。1つ1つに意味があつた。思いを込めて、それを忘れないようにピアスとこう形で自分に残してた。

校則違反なので、見つかると怒られたけど、顧問だった先生はその後に必ず心配をしてくれた。

あたしは、それが嬉しかったんだ。

「もしもし、真弥？ 部活終わった？」

「終わったよ。今どこ？……わかった、すぐ行くね。」

学校近くのファミレスにあたしは向った。

「ごめん待った？」

「大丈夫！ 真弥なんか頼む？」

「うん。 ドリンクバーでいい。」

「食べないの？？」

「お腹減っていないからー。」

「そかあ、どうやああたし食べるよ？ いい？？」

「せつかく待つてくれてたのにごめんね？」

「いいつじばー。」

あたしは、食べれなくなつてた。食べると吐きそうになる。食べなくても特にお腹は空かない、1日1食でも十分。あたしの拒食症がはじまつた。

「真弥ーきたよーーあれぢやない?」

「多分そつだわ、行つてくるね。」

「の口もまたあたしは、体を売る。」

「名前なんてこいつの?」

「??.あゆみだよ。」

「あゆみちゃんかあー、また会つてくれる?」

「もううらんだよー。」

バカバカしい。いちいち名前なんて教えないよ。

あたしは、毎日違う名前で抱かれた。

財布に何万も入つてて当たり前。金が無くなりや、誰かつかまえて。そんなことの繰り返し。

「あゆみちゃん…腕の傷どうしたの?傷跡もたくさんあるね?」

「…べつに。」

「リストカットってやつっ..」

唐突に客に聞かれた。

あたしは、金くれるやつせみんな畜生呼んでたしそう思つてた。

「やつだよ。自分で切つたんだよ。」

「痛くないの?」

「痛くないの?」

「でも、切つちや駄目だよ。」

「.....なんで?..どつして、切つちやいけないの?」

「しどがゅうたうどくあるの?..」

「ここよ。べつ。」

「駄目だよ。」

「.....。「うむセーヌー..あんたに、あたしの何がわかるだよー..」

「わからなーけど、切つちや駄目だよ。」

「.....偉やつて重つてじやねーよー..」

「んなやつは、初めてであたしは、どうしていいかわからなくなつた。そのままホテルを出て指定した場所まで送らせた。

「あゆみちゃん、またね。」

「……。」

またなんてないよ。あたしは、気分が悪くなつて密と別れてすぐこの手首を切つた。

みんな決まって書いた言葉
「切つたら駄目」

なんで？あたし悪い」とした？自分を切つたらどうして、いけないの？

誰か教えてよ…。

「真弥どうした？顔色よくないよ？」

「…………切りたい……なんで切つちゃいけないの……あたしはこうしなきや駄目なんだよーー！」

「いいよ。切つて。その代わり切つたらあたしに見せな。手当でしあげるから…」

「…………えつ？」

あたしは、嬉しかった。初めて言つてくれた…切つていいよつて。あたしは、それ以来切る度に手当てをしてもらつた。

気がつけばあたしは、17歳。高校2年生。

見た目はどこにでも、いる女子高生。

まだまだ子ども。あたしは世の中をなめきつてたね。

そんなあたしにも、最愛の人ができる。

滅多に会えなかつたけど大好きだつたんだよ。

援交する度に初めて罪悪感が生まれてた。

自分を傷つけるのも減つていつた。

そんな矢先、母に援交がバレた。

当たり前だけど怒られた。でも、あたしはその場しのぎで

「悪いことした、もうしません。」って顔をした。

あたしは、バレても懲りずに援交を続けた。

愛する人には罪悪感でいっぱいだつたけど、自分を傷つける事に對しては何も思わなかつた。

まだまだ子どもなあたし。

若干17歳。

終わらない夢をみてるみたいな毎日。

「17」悪夢

17歳になった。

初めて、

「死にたい」と思いながらもダラダラと生き続けて早くも2年。実行に移さなかつたのは、あたし自身が…生きる為に切つていたから。

中学生の時ほんとに苦しかつた。ただの甘えかもしれないけど、あたしは押し潰されそうだつた。本気で死にたいと何回も思つた。

でも、段々と気がついた。生きなきゃいけない。死ぬ為ではなく生きる為に切つっていた。矛盾した行動で、自殺願望なんていうのも消えなかつたけど、生きたい自分も確実にいたんだ…

生きている証、赤い血を見る度に不思議と落ち着く自分。息苦しいのも、恐怖心からも逃れられる、唯一の手段がリストカット。

ボロボロになつた手首、体、心。それでもあたしは止めなかつた。

眠れない毎日、繰り返される自傷行為、食べ物を拒む体。まるで、長い長い、覚めることのない悪夢のよつた毎日。付きまとつ自殺願望。

漠然と湧き出で来る恐怖心、孤独、寂しひ。

あたしは…ほんとは…愛されたかったんだ…
でも、感情表現が苦手なあたしは、いつも誰かとぶつかってた…
ちゃんと愛されてる事も気がつかない。

「真弥瘦せた?」

「んー? 体重は落ちたけど。」

「ちやんと食べてる?」

「んー。あんまりお腹減らないしね…」

流石に、周りの友達も心配しちゃじめた…。
いつも手当してくれた、薰ちゃん。話をたくさん聞いて、助けて
くれた京子ちゃん。
誰よりも早くあたしの変化に気がついてくれてた。

「京子、今日ひま?」

「何、真弥?」

「泊まつてもいい? ?」

「あー、いいよー。あなー。あなー。」

「あつがとう。」

「また親ともめたんでしょう？」

京子が見透かしてゐるような顔してあたしに問い合わせた。

「…ブハッ！…よくわかるね、あたしのこと。」

「ブッ！…真弥は単純だからね！」

その日は久しぶりにぐっすり眠れた。

そして、あたしは気がつけば高校3年生。

「真弥……ヤバいよ……」

「ん？…どうしたの？」

薰ちゃんが朝から息を切らして走つて來た。

「あたし……彼氏と別れたの……」

「ブハッ！…アハハ！…また？」

「アハハハハハ……！」

つまらないことでアタシ達はよく笑った。馴染めなかつたクラスも
クラス変えがないせいもあつてか、はたまた彼女達2人のおかげか、
喧嘩はたくさんしたけど、少しずつ馴染めるようになつてきた。

あれだけひどかつた、あたしも少しずつマシになつていつた。
何にもなかつたかのように、今までの生活が嘘だつたかのように日々
は過ぎた。

あたしも、リストカットは知らないうちにしなくなつた。同時にO
Dもしなくなつた。人込みは苦手だつたけど、外に出るのは怖くな
くなつた。

今まで辛かつたのが嘘のように過ぎていつた。
どうしようもなかつたあたし。
死に損ないだつたあたし。

なんとなく変わつたあたし。

17歳。

「17」卒業

卒業間近の高校生真弥17歳。

嫌でも避けて通れないのが、進路。

あたしは、今までただ死にたいだけの人だった。

夢もあつたけど、成績の悪かつたあたしは諦めた。

「真弥、進路どうするの?」

「どうしようね。京子は?」

「あたしは、大学行くよ。」

「薫は?」

「あたしは、就職ー」

「そかあ…」

「その時だった…

「松口さんー松口真弥さんー職員室まできなさいー。」

担任直々に呼び出しきくらつたあたしは、重い腰をあげた。

「あんた何したの?」

「どうせ進路でしょ？」

2人に、冷やかされながら、あたしは職員室に向かった。

「失礼しまーす。」

「松口さん、ちょっと座つて。」

あたしは、担任が大嫌いだ。ムスッとして、制服のポケットに手を突っ込んだまま、職員室の隅っこの椅子に座った。

「まず、貴方、ピアスは外しなさい。校則違反よ。」

「…………。」

「……、外しなさい。」

少し声を荒げて言う担任を睨みながら、渋々ピアスを外した。次から次にとられて行くピアス。

「あなたねえ……一体いくつあけてるの……」

呆れた口調で担任が言つ。

「さあ……。」

あたしは、分かつてゐるけど、話したくないからため息混じりで答えた。

「貴方、進路はどうするの？」

「…………、 やあ……。」

「「」」母親とは、お話したの？」

「…………別にい。」

「あのね、貴方、みんなはもう決まってるのよー。」

「…………だから。」

「取り残されてるのよー。」

「…………ふーん。」

「恥ずかしくないのー。」

「別」。

「このままじゃ、卒業も危ないわよー。」

「…………ふーん。」

「聞いてるのー。」

「…………うぬやいなあ。聞いてるよー。」

「今週中に決めてね。これ、調査表だからちゃんと書くのよー。」

「…………。」

あたしは、調査表を持つて無言で職員室を後にした。

「夢…かあ…。」

あたしは、バンドが好きだった。ライブを見に行くだけじゃなしに自分もステージに立つたりマイクスタッフをしたりしていた。

かといって、歌手になりたいわけでもないし、バンドで食べていこうとも思つてもいなかつた。

でも…マイクだけは…やりたかつた。

それが夢だと気付くまで時間はからなかつた。

それから3日後の放課後、あたしはまた担任に呼び出しへりつた。

「松口さん、これはどういひことなのーー。」

「…………進路。」

「就職もしないで学校にも行かないで、何が進路なのーー！」

「…………つせいなあ。」

あたしは、進路希望に

「勝手にする」と書いて提出した。

「ねえ、先生はあなたの事思つて書つてたのよ？」

「…………笑わせんなよ。」

「松口さん…………いい加減にしなやこー。」

「…………そのまま返してやるよ。」

あたしは、担任を睨み付けドアを勢いよくあけて玄関に向かった。

そこには、京子が心配せずに待つてくれた。

「あー、『メン。帰るー。』

「早かつたね？」

「松口…………。」

担任があたしを追つて走ってきた。

「…んだよ。これ以上お前に話す事なんかねえよ。」

「まだ、話は終わってないでしょー。」

「帰ろ、京子。」

「…真弥に何言つても無駄だよ。諦めなよ、先生。」

.....

担任はそれつきり何も言ってこなかつた。

京子が笑いながらあたしに話しかける、つられてあたしも笑う。
あたしだって…考えてるんだよ。

それから、卒業式まではあつという間に過ぎた。
なんとか、あたしも卒業は確定した。進路もバイトしながらお金を見
貯めて学校に行くつて形で落ち着いた。

卒業式は、あんまり覚えてない。悲しい訳でもないし嬉しい訳でもない。席が近かつた薫と田が合ひ度笑つてたことくらいしか本当に覚えてない。

息苦しかった制服もなくなつた。

でも、犯した過ちは消えない。

自殺未遂、オーバーダーズ、拒食、援助交際。それを…忘れさせないかのように残つた腕の傷跡。

あたしに残つたのはリストカットの傷跡だけ。

愛する人も…いつの間にかいなくなつた。

自業自得だなんて…今更思つて…

帰つてあたしは泣いた。今までの分を全部流し去るかの様に…誰もいない部屋で泣いた。

でも、京子と薰は最後まであたしを見捨てないでくれた。それが嬉しくてまた泣いた。

松口真弥 18歳。
高校卒業。

そして、新たな道に
：

「18」選んだ道

高校を卒業して、あたしは働きだした。
規則のゆるい会社に入ったあたしは髪もかなり明るい色にしたり、
更にピアスを増やしたりと今までの分を爆発させるかのように変わ
つていった。

でも、おもづのように貯金はできず、あたしはバイトを掛け持ちする
よづになつた。

忙しくて大変だけど、毎日がとても楽しかった。

京子と薰とは相変わらず連絡はとつてたし、よく遊んだりした。

そして…あたしにはもう一つ楽しみがあつた。

ホストクラブ。

聞こえはよくないかもしない…でも、あたしには憧れの人がいた。

その人に会つ為にあたしは、ホストクラブに行く用になつた。

「真弥ちゃん？メールくれてたよね、初めまして！」

あたしは、泣いた。感激して泣いた。こんな事はライブ以外初めてで自分でも、びっくりするくらい泣いてしまった。

そして、あたしはホストクラブに通うようになった。音楽と同じくらいの支えになった。

でも、恋愛感情は不思議と沸かなかつた。それでも唯一あたしが素直になれる場所だった。

18歳の夏あたしは初めて東京に行つた。

ライブの遠征。鞄に溢れる荷物、それと同じ位溢れる希望に楽しみ。右も左もわからない大都会に1人足を踏み入れた。

ライブ前にはコスプレなんかして。ライブは思い切りハジケテ。

そして…その夜初めて足を踏み入れた憧れの歌舞伎町。

キラキラ輝くネオン街。明るい処は大嫌いだったのに不思議とこの場所は別だった。

あちこちに散らばるホストにスカウトマン。それにサラリーマンの集団、綺麗に身を纏つた女の子。

慣れないヒールをはいて慣れないメイクに髪型をしてあたしは背伸びしてこの街に入ったんだ。

寂しさも不安も此処に来れば全部かき消された。眠らない街歌舞伎町。

あたしは、この街の虜になつた。

以来あたしは、月に1度は訪れるよになつた。楽しくて仕方ない街。ネオン街は18のあたしの憧れだった。でも、この頃のあたしは何もわかつてなかつた。飲み込まれていないつもりだった。でも、十分飲み込まれていた。

そして・・・あたしは、キヤバ嬢になつた。キヤバ嬢「あげは」が
生まれた。

あたしは、新たな道を歩いていた。キャバ嬢。慣れない事だけの世界。

飲めないお酒を飲んで、ひとみしりをかくして必死になつて話してた。でも、なかなかとれない指名。なんども、慣れないヒールにつまづく姿はあるで自分の人生そのもの。

毎日、くやしくて、もどかしくて泣いた。

ドリマのような綺麗なだけの世界なんかじゃない。世間が思つてゐるよつな、楽な仕事なんかじゃない。でも、悪いもんでもない。あたしは、自分がこの仕事をやつてるつむじ、同業にあたる今まで通つてたホストクラブのことを思い出した。なんとなくは、わかつてたこと。でも、こつもハッキリわかると、急に今までの自分がバカらしく思えた。

でも・・・あたしは行くことを止めなかつた。寂しさを、もどかしさを、惨めさを紛らわすために。

そして、仕事もなんとか慣れ始めかけもちで、体は凄く疲れていたけど、こんなに楽しい毎日は初めてで、初めて生きててよかつたと思いつめた頃、あたしは誕生日を迎えた。

「あげはちゃんお誕生日おめでとう。」

「あげはちゃん、やつと19歳だねー！」

「まんとおめでとう。」

少ないながらも、わざわざあたしなんかのために来てくれたお客さ

ん。ほんとに嬉しかった。エリックもなく嬉しくてこんなに感激した誕生日は初めてだった。

この仕事をしててよかったです。ホントにそう思えた瞬間だった。

「みんな、ありがとう……」

そして、「一度この時期あたしは、決断した。明確な目標をたてた。行きたい学校をみつけて、両親と逃げずに向かいあつて話をして……。

きっと、まだ遅くない。今からでも……。

真弥、只今20歳。私は今も働いている。夢のために。いつかどんなに時間がかかっても叶えようと思う。相変わらず、ライブには通つてゐる。でも、歌舞伎町は卒業できたか

な。たまに遊びにはいくけど、前みたいに中毒みたいになつては通つてない。

あたしの、犯してきた過ちは消えない。手首に残る傷跡も、消える事はないだろう。

まだまだ、所詮は20。知らないことも沢山ある。きっとこれからも、辛いことはあるだろう。

でも、あたしは戦つてみようと思う。もう、逃げてばかりの人生は嫌だから。支えもある。何より一人じゃない。

やらないで、後悔するよりは、やってから後悔したい。

こんなに変われた。あたしは、悲劇のヒロインなんかじゃない。

これから先、待っているのはハッピーペーペンドか、はたまたバットエンドか。

それは全部あたし次第。

生きるって、こんなにも楽しいことだったんだね。

END

「19」決断（後書き）

やつとりや、書を終わつました。ほんとこ、文才ないです笑
いつかリメイクしたいですねこれ・・・。やつとりや、詳しく述べ
うか・・・。
今回はナラシと流しかやつてますね・・・。今

あまり長くないお詫なんですが、更新が遅くて、えらい時間がかか
つてしまひました。

何よつ最後まで読んでくださつた皆様あつがとハビヤセこます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6500c/>
